広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	愛媛県松山市方言における命令表現の音調
Author(s)	久保, 博雅
Citation	論叢 国語教育学 , 16 : 13 - 23
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50689
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050689
Right	
Relation	

Hiroshima University Institutional Repository

愛媛県松山市方言における命令表現の音調

久保　博雅

１　はじめに

命令表現は全国の方言を対象として記述がなされているが、その多くは音調を捨象した記述である。しかしながら、森（2019）が連用形命令を有核型と無核型に分けて分析したように、同一の形式が複数のアクセント型を持つことがある。また久保（2018・2020b）が指摘したように、文末イントネーションがかぶさることで発話機能にも差異が生じる[1]。したがって、命令表現を記述する上で音調の存在は無視できないものであり、音調まで記述することでより精確な研究になると言える。

松山市方言における主要な命令表現には（1）命令形、（2）連用形、（3）オ＋連用形、（4）テ形、（5）ンカ形、（6）ンケン形の 6 つがある。以下に例を示す。

（1）イソイドンジャケン　チャッチャト　カエ。　（急いでいるのだからさっさと買え。）
（2）ハヨ　ムコー　イキ。　（早く向こうに行け。）
（3）ヨカッタラ　コノ　カミニ　オカキ。　（よかったらこの紙に書きなさい。）
（4）アシタ　ロクジニ　オコシテ。　（明日 6 時に起こして。）
（5）ハヨ　ベンキョーセンカ。　（早く勉強しなさい。）
（6）ヤリタインヤロ？　ヤランケン。　（やりたいんでしょ？やったら。）

本稿では以上の 6 形式について、それぞれがとり得る音調を記述する。そして、各形式で用いられる音調の特徴や、形式間で比較することで明らかになる特徴を述べる。上述のとおり、音調は発話機能の違いにも関わるが、本稿では音調の記述とその形式間の比較にとどめ、発話機能との関係については別稿で論じることとする。

２　先行研究

松山市方言は伝統的に、中央式アクセントに属する。中井（2002）は京阪系アクセントにおける動詞の基本形について「拍数に関らず、2 または 3 種」と述べ、高起（H）0 型と低起（L）0 型を基本とする。また、周辺部ではそれに高起式-3 型が加わるとしている（中央部では高起式-3 型は 0 型になる）。

松山市方言の動詞アクセントについての研究は、山内（1932）、杉山（1955）、平山（1957）、上野（1995）、秋山（2017）、久保（2020a）などが挙げられる。本稿で扱うデータの話者は久保（2020a）と共通しており（後述）、青年層で個人差はあるが古形のアクセントを残していた。それによると、松山市方言における動詞終止形のとり得るアクセント型は次の通りで、中井の記述に一致する。

[1] 発話機能（speech function）について、『日本語文法事典』では「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」（執筆：山岡政紀）と説明されている。命令表現における発話機能は、聞き手への拘束力が強く非聞き手利益である〈命令〉、拘束力が弱く非聞き手利益である〈依頼〉、拘束力が弱く聞き手利益である〈聞き手利益命令〉、拘束力が弱く聞き手利益である〈勧め〉の 4 つがある。

五段活用 3 拍：H0 型、H1 型、L0 型　　五段活用 2 拍：H0 型、L0 型
一段活用 3 拍：H0 型、L0 型　　一段活用 2 拍：H0 型、L0 型
カ変・サ変：L0 型

松山市方言の命令表現については久保（2018・2020b）の一連の研究がある。このうち久保（2020b）では上記の 6 つの命令表現の形式の音調を記述しており、音調によって担う発話機能が異なることを指摘している。ただし、当該研究は 3 拍以上の動詞が示されていないことや、そのために各形式はそれぞれどのような音調をとるかなど不明な点も残されていた。本稿ではその点を補填し、松山市方言における命令表現の音調を体系的に見ていく。

３　データ

本稿では以下の話者への調査を基に記述を行う。なお、話者 A・B は久保（2020a）の話者 A・D、及び久保（2020b）の話者 A・B に一致する。

話者 A　筆者。男性。1991 年生。2010 年 3 月まで松山市に、2010 年 4 月以降は徳島県および広島県に居住。
話者 B　2000 年生。女性。2018 年 3 月まで松山市に、2018 年 4 月以降は愛知県に居住。

４　命令表現の音調

ここで示す音調は久保（2020b）で示したものに加筆・修正を加え、整理し直したものである。動詞は 2 拍から 4 拍までのデータを示すが、2 拍・3 拍動詞は久保（2020a）に基づいており、4 拍動詞は今回新たに加えたものである。4 拍動詞については中井（2002）が述べる高起-3 型となる語、及び L0 型をとる語はほとんど現れなかった[2]。その代わりに標準語の干渉を受けたと考えられる H3 型、L3 型が多く現れる。まず、それぞれの形式における音調の特徴を述べたのち、形式間を比較しその関係性を述べる。各形式の音調は、①アクセント型の特徴（特に核の有無）、②終止形での型の区別を保つか否か、③文末に上昇イントネーションを伴うか否かの 3 つの観点で記述する。表内に示す形式について、複数ある場合は音調が複数あるものである。また、～は音調が揺れるものを表す。音調の表記は、[は上昇、] は下降、[[は音節内の上昇、]] は音節内の下降を表す。

４．１　命令形

表 1 は命令形がとり得る音調を示したものである。①命令形は基本的に有核である。五段活用 2 拍は無核（カ[ケ）だが、長音化するとカ[ケ]ーとなり有核で実現する[3]。一段活用語、及びカ変・サ変は長音化が義務的であり、[キコ]エ、[ス]テ、[ネ、[キのように現れることはない。②五段活用 3 拍、一段活用語、カ変・サ変は終止形における型の区別を失うが、五段活用 2 拍では命令形においても型の区別を保持する。また、4 拍語では五段活用で H0 型語と H3 型語は命令形でどちらも[◯

[2] 中井（2002）は高起-3 型となる 4 拍動詞の例として「[アツ]メル（集める）」「[ヨロ]コブ（喜ぶ）」を挙げている。
[3] 中井（2002）は、京阪系アクセントにおいて「書け」は「カ[ケ]]」と拍内下降するとしている。これについて森（2020）も大阪方言の命令形について中井を引用し指摘している。ただし本稿では、下降を実現するために長音化しやすくなるのであり、この場合の母音の長短には音韻的な区別はなく連続的であると考え、一貫して長音で表記する。

〇〇]〇となり型の区別を失うが、L3 型語は[カカワ]レとカカ[ワ]レで揺れており、型の区別を完全に失ってはいない。同じく 4 拍語の一段活用では H3 型語と L3 型語が命令形ではどちらも[〇]〇〇ーとなって型の区別を失うが、H0 型語は命令形では[キコ]エーとなり、[〇]〇〇ーと区別される。五段活用語（2 拍動詞は長音化したもの）と一段活用 3 拍語はいずれも[〇]〇〇または〇[〇]〇の形で現れるため、3 拍語として型は共通し、型の区別を失う。また 2 拍・3 拍において、多くは H1 型をとる（そのために型の区別も失われる）が、4 拍動詞は[シタガ]エ、[キコ]エーのように必ずしも H1 型にはならない。③命令形では文末に上昇のイントネーションを伴う形式はない。

表１　命令形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	命令形
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[イ]ケ（ー）　[イ]ケ]ー
		L0 型	書く	カ[ク	カ[ケ　カ[ケ]ー
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[ウ]タエ（話者 A）　ウ[タ]エ（話者 B）
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オ]モエ（話者 A）　オ[モ]エ（話者 B）
		L0 型	歩く	アル[ク	[ア]ルケ（話者 A）　ア[ル]ケ（話者 B）
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[シタガ]エ
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[ウタガ]エ
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	[カカワ]レ～カカ[ワ]レ
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	[ネ]ー
		L0 型	見る	ミ[ル	[ミ]ー
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	[ス]テー　ス[テ]ー
		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	[ニ]ゲー　ニ[ゲ]ー
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[ハジ]メー
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[ア]ワセー
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	[カ]カエー
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	[キ]ー
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	[セ]ー

４．２　連用形

表 2 は連用形がとり得る音調を示したものである。連用形は標準語では中止にも用いられるが（「買い物に行き、家に帰る」など）、松山市方言においては中止で用いられることはなく、自立形としては命令でしか用いない。①連用形には有核形と無核形がある。有核形は長音形で実現し、語末に核を有する。一段活用 2 拍及びカ変は命令形と同形となる（表内では（ ）を付けて表す）。これらの場合は、連用形と命令形の対立が中和するとも言える。無核形は語頭から高いものと、語末拍前に上昇するものがある。②一段活用 2 拍は活用することで型の区別を失い、また有核形については先述の通り命令形とも中和する。五段活用 2 拍と一段活用 3 拍は、無核は[〇〇（ー）対〇[〇（ー）、有核は[〇〇]ー対〇[〇]ーで型の区別を維持する。五段活用 3 拍や 4 拍といった活用形の拍数が長くなる語では、高起語同士（3 拍の H0 型と H1 型、4 拍の H0 型と H3 型）の型区別は失われる。その一方で低起語は高起になることもあるが、低起を保ったまま発音される場合がある。③文

末音調については、無核の場合は上昇のイントネーションを伴う形があり、表中の各例の 2 行目に †を付した音節内上昇を持つ形がそれに当たる（4.3 以降も同様の表記を用いる）。すなわち文末の音節内上昇は、無核の音調に上昇イントネーションがかぶさったものであると見なせる。なお、高起語の場合、上昇の音調を実現しやすくするために相対的に低いピッチで始まる。例えば、一段活用 4 拍 H0 型語は上昇を伴わない場合は[○○○（一）で発音されるが、上昇を伴う場合は○○[[○のように語頭から上昇までは相対的に低く発音される。有核の場合は、文末上昇は起こらない。

表２　連用形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	連用形	
					無核	有核
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[イキ（一） †イ[[キー	イ[キ]ー ～[イキ]ー
		L0 型	書く	カ[ク	カ[キ（一） †カ[[キー	カ[キ]ー
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[ウタイ　ウタ[イ †ウタ[[イー	[ウタイ]ー ～ウ[タイ]ー
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オモイ　オモ[イ †オモ[[イー	[オモイ]ー ～オ[モイ]ー
		L0 型	歩く	アル[ク	[アルキ　アル[キ †アル[[キー	[アルキ]ー ～ア[ルキ]ー
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[シタガイ　シタガ[イ †シタガ[[イー	[シタガイ]ー
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[ウタガイ　ウタガ[イ †ウタガ[[イー	[ウタガイ]ー
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	[カカワリ　カカワ[リ †カカワ[[リー	カカワ[リ]ー ～[カカワリ]ー
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	[ネ（一） [[ネー	（[ネ]ー）
		L0 型	見る	ミ[ル	[ミ（一） †[[ミー	（[ミ]ー）
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	ス[テ（一） †ス[[テー	[ステ]ー～ス[テ]ー
		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	ニ[ゲ（一） †ニ[[ゲー	ニ[ゲ]ー
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[ハジメ（一） †ハジ[[メー	[ハジメ]ー ～ハ[ジメ]ー
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[アワセ（一） †アワ[[セー	[アワセ]ー ～ア[ワセ]ー
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	カ[カエ（一）	カ[カエ]ー

					†カカ[[エー	
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	[キ（ー） †[[キー	（[キ]ー）
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	[シ（ー） †[[シー	[シ]ー

４．３　オ＋連用形

表 3 はオ＋連用形がとり得る音調を示したものである。①連用形と同様、有核形と無核形がある。有核形は長音形で実現し、語末に核を有する。無核形は語頭から高いものと、語末拍前に上昇するものがあり、この点も連用形と同様である。②活用形、拍数に関わらず、活用すると終止形でなされていた型の区別を失う。③文末音調については、連用形と同様に無核の場合に上昇のイントネーションを伴う。高起語の場合に上昇の音調を実現しやすくするために相対的に低いピッチで始まるという点も共通する。有核の場合は、文末上昇は起こらない。

表３　オ＋連用形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	連用形	
					無核	有核
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[オイキ(ー)　オイ[キ(ー) †オイ[[キー	[オイキ]ー 〜オイ[キ]ー
		L0 型	書く	カ[ク	オカ[キ（ー） †オカ[[キー	オカ[キ]ー
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[オウタイ　オウタ[イ †オウタ[[イー	[オウタイ]ー 〜オウタ[イ]ー
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オーモイ　オーモ[イ †オーモ[[イー	[オーモイ]ー 〜オーモ[イ]ー
		L0 型	歩く	アル[ク	[オアルキ　オアル[キ †オアル[[キー	[オアルキ]ー 〜オアル[キ]ー
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[オシタガイ　オシタガ[イ †オシタガ[[イー	[オシタガイ]ー 〜オイタガ[イ]ー
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[オウタガイ　オウカガ[イ †オウカガ[[イー	[オウタガイ]ー 〜オウタガ[イ]ー
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	[オカカワリ　オカカワ[リ †オカカワ[[リー	[オカカワリ]ー 〜オカカワ[リ]ー
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	オ[ネ（ー） †オ[[ネー	オ[ネ]ー
		L0 型	見る	ミ[ル	オ[ミ（ー） †オ[[ミー	オ[ミ]ー
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	[オステ　オス[テ †オス[[テー	[オステ]ー 〜オス[テ]ー

		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	[オニゲ　オニ[ゲ †オニ[[ゲー	オ[ニゲ]ー ～オニ[ゲ]ー
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[オハジメ　オハジ[メ †オハジ[[メー	オハジ[メ]ー
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[オアワセ　オアワ[セ †オアワ[[セー	オア[ワ]セー
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	オ[カカエ　オカカ[エ †オカカ[[エー	オ[カカエ]ー
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	オイ[デ　×オキ（ー）	
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	オ[シ（ー） †オ[[シー	オ[シ]ー

４．４　テ形

表 4 はテ形がとり得る音調を示したものである。松山市方言においてテ形は命令に限らず、中止（「買い物に行って、家に帰る」のような用法）でも用いられるが、表内で併せて示す通り、アクセントが異なるため区別される。①テ形は無核形のみである。森（2020）は大阪方言において、終助詞が付いた場合有核があり得るとしているが（例：ア[ルイテ]ーヤ）、筆者の内省では、この形式は関西方言的であり、松山市方言としては許容し難い。②2 拍では活用しても高起対低起の形で区別は保たれるが、3 拍以上では区別がほぼ失われる。五段活用 4 拍では高起語同士（H0 型と H3 型）の区別は失われるが、L3 型語は低起を保ち、高起語と低起語の区別はなされる。③テ形には文末に上昇のイントネーションが伴う場合がある。連用形やオ＋連用形と同様、高起語の場合に上昇の音調を実現しやすくするために相対的に低いピッチで始まる形は 2 拍で顕著に見られる。

表４　テ形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	テ形（中止）	テ形（命令）
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[イ]ッテ イッ[テ]]	[イッテ †イッ[[テー
		L0 型	書く	カ[ク	カイ[テ]]	カイ[テ †カイ[[テー
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[ウ]タッテ [ウ]タッ[テ]] [ウタッテ]]	[ウタッテ　ウタッ[テ †ウタッ[[テー
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オ]モッテ [オ]モッ[テ]]	[オモッテ　オモッ[テ †オモッ[[テー
		L0 型	歩く	アル[ク	[ア]ルイテ [ア]ルイ[テ]]	[アルイテ　アルイ[テ †アルイ[[テー
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[シタガッテ シタガッ[テ]]	[シタガッテ　シタガッ[テ †シタガッ[[テー
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[ウタガッテ	[ウタガッテ　ウタガッ[テ

					ウタガッ[テ]]	†ウタガッ[[テー
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	カカ[ワ]ッテ カカワッ[テ]]	カ[カワッテ　カカワッ[テ †カカワッ[[テー
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	[ネ]テ[4]	[ネテ †ネ[[テー
		L0 型	見る	ミ[ル	ミ[テ]]	ミ[テ †ミ[[テー
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	[ス]テテ [ス]テ[テ]]	[ステテ　ステ[テ †ステ[[テー
		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	ニゲ[テ]]	[ニゲテ　ニゲ[テ †ニゲ[[テー
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[ハジ]メテ [ハ]ジメ[テ]]	[ハジメテ　ハジメ[テ †ハジメ[[テー
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[ア]ワセテ [ア]ワセ[テ]]	[アワセテ　アワセ[テ †アワセ[[テー
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	カカエ[テ]]	[カカエテ　カカエ[テ †カカエ[[テー
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	キ[テ]]	キ[テ †キ[[テー
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	[シ]テ シ[テ]]	シ[テ †シ[[テー

４．５　ンカ形

次の表 5 はンカ形がとり得る音調である。ンカ形は否定形＋カであるため、否定形のアクセントを併せて示す。①有核型と無核型があり、有核型の場合、核を否定形部分に有する形と長音化し「カ」に有する形がある。前者の核の位置は否定辞「ン」か、またはその 1 拍前かで揺れる。②型の区別は一段活用 2 拍では失われるが、五段活用 2 拍及び 3 拍以上では、高起語と低起語の区別が認められる。ただし、他の形式でも見られたように、五段活用 3 拍や 4 拍で高起の型が 2 種類ある場合（3 拍：H0 型対 H1 型、4 拍：H0 型対 H3 型）、その区別は失われる。また、一部の高起語は低起で現れることもある。③文末音調については、上昇イントネーションはンカ形では見られない[5]。

表５　ンカ形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	否定形	ンカ形	
						無核	有核
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[イカン	[イカンカ	[イカン]カ ～[イカ]ンカ

[4] [ネ]テは 2 拍の H1 型であるため、他の語と異なり文末の音節内下降を伴うことができない。ただし、筆者の内省では文末を長音化させその長音拍の前で上昇し拍内下降をする「[ネ]テ[ー]]」という形式が許容できる。
[5] ンカ形無核の文末に上昇が伴うものはあり得るが、その場合命令ではなく疑問の表現となるため、本研究には含めない。

							[イカンカ]ー イカン[カ]ー
		L0 型	書く	カ[ク	カ[カン	カ[カンカ	カ[カン]カ ～カ[カ]ンカ [カカンカ]ー カカン[カ]ー
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[ウタワン	[ウタワンカ	[ウタワ]ンカ ～[ウタワン]カ ～ウ[タワ]ンカ ～ウ[タワン]カ [ウタワンカ]ー ウタワン[カ]ー
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オ]モワン	[オモワンカ	[オモワ]ンカ ～[オモワン]カ ～オ[モワ]ンカ ～オ[モワン]カ [オモワン]カー オモワン[カ]ー
		L0 型	歩く	アル[ク	アル[カン	ア[ルカンカ	ア[ルカ]ンカ ～ア[ルカン]カ [アルカンカ]ー アルカン[カ]ー
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[シタガワン	[シタガワンカ	[シタガワ]ンカ ～[シタガワン]カ [シタガワンカ]ー シタガワン[カ]ー
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[ウタガワン	[ウタガワンカ	[ウタガワ]ンカ ～[ウタガワン]カ [ウタガワンカ]ー ウタガワン[カ]ー
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	カカワ[ラン	カ[カワランカ	カ[カワラ]ンカ ～カ[カワラン]カ [カカワランカ]ー カカワラン[カ]ー
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	[ネン	[ネンカ	[ネン]カ～[ネ]ンカ [ネンカ]ー ネン[カ]ー
		L0 型	見る	ミ[ル	[ミン	[ミンカ	[ミン]カ～[ミ]ンカ [ミンカ]ー

							ミン[カ]ー
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	[ステン	[ステンカ	[ステ]ンカ ～[ステン]カ ～ス[テ]ンカ ～ス[テン]カ [ステンカ]ー ステン[カ]ー
		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	ニ[ゲン	[ニゲンカ	ニ[ゲ]ンカ ～ニ[ゲン]カ [ニゲンカ]ー ニゲン[カ]ー
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[ハジメン	[ハジメンカ	[ハジメ]ンカ ～[ハジメン]カ [ハジメンカ]ー ハジメン[カ]ー
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[アワセン	[アワセンカ	[アワセ]ンカ ～[アワセン]カ [アワセンカ]ー アワセン[カ]ー
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	カカ[エン	カ[カエンカ	カ[カエ]ンカ ～カ[カエン]カ カ[カエンカ]ー カカエン[カ]ー
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	[コン	[コンカ	[コン]カ～[コ]ンカ [コンカ]ー コン[カ]ー
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	[セン	[センカ	[セン]カ～[セ]ンカ [センカ]ー セン[カ]ー

４．６　ンケン形

表 6 はンケン形がとり得る音調を示したものである。ンケン形は否定形＋ケンであるため、ンカ形と同様に否定形のアクセントを併せて示す。①ンケン形は有核形のみである。核を否定形部分に有する形と「ケ」に有する形がある。前者はンカ形と同様に、否定辞「ン」か、またはその 1 拍前かで核の位置が揺れる。②一段活用 2 拍では活用した場合に型の区別を失う。5 段活用 2 拍及び 3 拍以上では型の区別が曖昧になり、低起（カ[カン]ケンもしくはカ[カ]ンケン）ではなく高起で現れる場合もある。他の形式と同様に、五段活用 3 拍や 4 拍で高起の型が 2 種類ある場合（3 拍：H0 型対 H1 型、4 拍：H0 型対 H3 型）、その区別は失われる。③文末の上昇は伴わない。

表６　ンケン形の音調

活用	拍	アクセント型	語例	終止形	否定形	ンケン形
五段	2 拍	H0 型	行く	[イク	[イカン	[イカン]ケン～[イカ]ンケン イカン[ケ]ン
		L0 型	書く	カ[ク	カ[カン	[カカン]ケン～[カカ]ンケン ～カ[カン]ケン～カ[カ]ンケン カカン[ケ]ン
	3 拍	H0 型	歌う	[ウタウ	[ウタワン	[ウタワ]ンケン～[ウタワン]ケン ウタワン[ケ]ン
		H1 型	思う	[オ]モウ	[オ]モワン	[オモワ]ンケン～[オモワン]ケン オモワン[ケ]ン
		L0 型	歩く	アル[ク	アル[カン	[アルカ]ンケン～[アルカン]ケン ～ア[ルカ]ンケン～ア[ルカン]ケン アルカン[ケ]ン
	4 拍	H0 型	従う	[シタガウ	[シタガワン	[シタガワン]ケン～[シタガワ]ンケン シタガワン[ケ]ン
		H3 型	疑う	[ウタガ]ウ	[ウタガワン	[ウタガワン]ケン～[ウタガワ]ンケン ウタガワン[ケ]ン
		L3 型	関わる	カカ[ワ]ル	カカワ[ラン	[カカワラン]ケン～[カカワラ]ンケン カカワラン[ケ]ン
一段	2 拍	H0 型	寝る	[ネル	[ネン	[ネン]ケン～[ネ]ンケン ネン[ケ]ン
		L0 型	見る	ミ[ル	[ミン	[ミン]ケン～[ミ]ンケン ミン[ケ]ン
	3 拍	H0 型	捨てる	[ステル	[ステン	[ステン]ケン～[ステ]ンケン ステン[ケ]ン
		L0 型	逃げる	ニゲ[ル	ニ[ゲン	[ニゲ]ンケン～[ニゲン]ケン ～ニ[ゲン]ケン～ニ[ゲ]ンケン ニゲン[ケ]ン
	4 拍	H0 型	始める	[ハジメル	[ハジメン	[ハジメン]ケン～[ハジメ]ンケン ハジメン[ケ]ン
		H3 型	合わせる	[アワセ]ル	[アワセン	[アワセン]ケン～[アワセ]ンケン アワセン[ケ]ン
		L3 型	抱える	カカ[エ]ル	カカ[エン	カ[カエン]ケン～カ[カエ]ンケン カカエン[ケ]ン
カ変	2 拍	L0 型	来る	ク[ル	[コン	[コン]ケン～[コ]ンケン コン[ケ]ン
サ変	2 拍	L0 型	する	ス[ル	[セン	[セン]ケン～[セ]ンケン セン[ケ]ン

４．７　考察

命令形と連用形有核型については、先述の通り一段活用 2 拍とサ変が同形であり、一部対立が中和されている。また、連用形とオ＋連用形は音調パターンが同じであることも分かる。

アクセント型の区別については、多くの命令表現において（1）一段活用 2 拍は区別を失う、(2) 五段活用 2 拍及び 3 拍では区別を保つ、(3) 拍数が長くなると高起のアクセント型が 2 種類あればその区別を失い、低起語は高起語で現れることもある、という特徴が認められた。型の区別が曖昧化する及び低起語が高起語で現れる点については、伝統的に区別されていたものが若年層では区別が失われつつある状態なのではないかと推察する。

文末音調については、連用形無核、オ＋連用形無核、テ形が上昇のイントネーションを伴うことができる。また、共通して有核形では文末に上昇は伴わない。本稿では文末音調として上昇イントネーションのみを認めてきたが、その一方で、下降のイントネーション（積極的下降）の可能性についても述べておきたい。連用形、オ＋連用形、ンカ形は共通して長音化して文末音節に核を持つ形がある。久保（2020b）では松山市方言における命令表現の発話機能と運用における考察の中で、「有核だと拘束力が強くなる傾向がある」と述べている。久保（2020b）及び本稿のこれまでの記述では有核型と見なしてきたが、有核型（文末音節に核）が共通して命令の拘束力を強める意味合いがあるのであれば、アクセントではなく下降のイントネーションと見なせる可能性がある。

５　おわりに

本稿では松山市方言における代表的な命令表現がとり得る音調についての記述を試みた。6 つの形式を取り上げたが、型の区別の保持不保持については共通した特徴があることがわかった。文末音調については、上昇イントネーションの有無について述べてきたが、4.7 でも述べた通り、下降イントネーションについても考慮すべきであることが明らかになった。また、今回は若年層のみのデータで記述を行ったが、中・高年層も対象に含めた記述も必要である。

参考文献

秋山英治(2017)『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント―日本語史再建のために―』おうふう
上野善道（1995）「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30
久保博雅（2018）「愛媛県松山市方言における命令表現の使用差」『言語文化研究』第 38 巻 1-2 号
久保博雅（2020a）「愛媛県松山市方言における青年層の動詞・形容詞終止形のアクセント」『国語教育研究』第 61 号
久保博雅（2020b）「愛媛県松山市方言における命令表現―発話機能と運用の記述・対照―」『日本方言研究会第 110 回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
杉山正世（1955）「愛媛県方言の甲種系統アクセント」『愛媛国文研究』4
中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
森勇太（2019）「西日本方言における連用形命令―命令形式の対照と地域差の形成―」『日本方言研究会第 109 回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会
森勇太（2020）「広島県安芸方言の命令形式―大阪方言との対照―」『国文学』第 104 号
山内千万太郎（1932）「松山方言のアクセント研究」『方言』2-3

（広島大学大学院博士課程後期３年）